ことばを生きる体験（一）
——乳児との語りあい——

浜口 順子

［レベーターの中で］

エレベーターにたまたま乗り合わせた二人の人が、無言のまま階級ランプの流れゆく点滅を見上げている——

これはことばの交わされない状況の居心地悪さを象徴するひとつの構図といえよう。乗り合わせた瞬間に軽く会釈でもしておけばまだ救われるのだが、さらに自然なこ
とばのやりとりがあればその狭い空間でのひとときは一
層過ごしやすいものになるだろう。たとえば、ひとりの
方が大きな荷物を両腕に積み上げているのを見て、大
変なお荷物ですね—ええ、でもこれも仕事ですから
ね、慣れてますよ—ところばを交わしたり、小さな子が
よくかがん—うまくになったのね—などと話したりす
ることもあるだろう。この会話のなかで荷物や子どもの
年令のことなどは話し手にとって非とも情報として知りたいような対象となっているわけではない。なぜか、考えたばかりに考えているわけではない。どうして考えたか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか。考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか。考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか。考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたのなのか、考えたののか
れのない状況を想定すると、たとえば先の「エレベータのなかの居心地悪い」に思い当たる。もともと知りえないどうしてであっても、エレベーターの狭い閉塞された空間がおたがいを無関心にはさせておかない。相手のことを気になるうえに、相手からも気にされているようで落ち着かない。個々が出会い、安定した共存空間を得るために、それぞれ固定的な世界の一部を相手に向け開く必要がある。つまり自分の一部を相手の前に現し分から行為に迫られる。その大型は手をさしのばす動作である。そして手をさしのばす。手をさしのばす。
朝、目覚めたばかりの赤ちゃんに「おはよう、朝です。」と話す。

言葉では「うとう」（言語）もしくは、「うとう」（身体表現）としての「うとう」を用いる。この関係は、お互いに響きあい、共鳴し、同じ感情のつながりを持ち合わせ、互いに響きあうこころがある。

赤ちゃんが遊んでいるときに、「パッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパッパ็
心理的に見て、こたえ外に語りだされる外語と、思
考や認識の用具としての内なる内語とに分けて考えられ
たすが。一方、内語は人間の世界を一定の秩序にしたがって整理して認知する基盤としての機能をは
たしてい、概念的・抽象的思考を可能にするものであるとする見
点を基本としている点では共通している。
このことばは、対照的といえるだろう。ことばにおける二通りの態度は、「ことばを「生きる」と、人いわばことばのなかに住みこんで融合するありのだろう。状況に応じて、比重を変えながら現れるだろう。考えるのは現実である。

新生児の微笑に伝えられるもの。新生児期にみられる生理微笑というのがある。うとうとしているときに、おそらく口端をピクリとほほえむように働く。生後間もない赤ちゃんというのは、顔の表情の変化が遅く、せいぜい泣くくらいなので、この微笑には会うこともないが、赤ちゃんらしいものがある。しかし妊娠が終わる時から、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わらぬことを力づくように働く。生後間もない赤ちゃんは、顔の表情が変わってあるということは「大きい」のひとつである。おとなたかるなることばは「大きい」のひとつである。

生後の微笑を前にして、「瞬間は嬉しくなるが、その微
笑がかたちだけのもので、いわば自然的な芸術は別の意味内容を含んでいる。笑って二人の関係に気づいて戸惑う。笑いという形式と芸術をただ自動的に直結させるものではなく、笑の語らわれている具体的な状況を生きようとするからこそかえって戸惑いに近いものを感じてしまうのだろう。つまりちゃんに関心を注いで共存の状況にあってこそ、笑の芸術に理由されていないで自在に読むことができるのだろう。しかし状況に固有の意味と芸術との間の矛盾を味わうのは、どこか不安でスリリングな体験でもある。だからそれは、作り上げるようになる。「快」の記号としての微笑が見られるようになると、なお一層おとなば幸福な気持ちになるのだろう。

△文献△

竹内敏晴「ことばが劈かれると」思想の科学社、一九七九

村瀬学「理解のおくれの本質」大和書房、一九八三、一九八四

やまだ義久「ことばの前のことば」新人書房、一九八四

（父の子女子大学）

訂正

四月号P37「ある夜のたより」新潮「川崎若菜幼稚園」の誤りです。お詫びして訂正いたしました。